

第2回 仙台市総合計画審議会起草委員会議事録

日 時 平成22年1月27日(水) 10:00～12:00
会 場 仙台市役所2階 第四委員会室
出席委員 江成敬次郎委員、大滝精一委員、小野田泰明委員、小松洋吉委員、西大立目祥子委員、間庭洋委員、柳井雅也委員 [7名]
欠席委員 庭野賀津子委員 [1名]
事務局 伊藤企画市民局次長、佐々木総合政策部長、折田総合計画課長、柳津総合計画課主幹
議 事 1 開会
2 議事
(1) 現行基本構想の総括について
(2) 新基本計画の策定方針について
(3) その他
3 閉会
配付資料 1 現行基本構想の検証について
2 現行基本構想の検証資料
3 現行基本構想の都市像概念図
4 共につくる未来の仙台(仙台市政だより平成22年1月号抜粋)

1 開会

大滝精一委員長

皆さん、おはようございます。ただいまから第2回の起草委員会を始めます。

今、お二人お見えになっておりませんが、時間の関係もありますし、間もなく到着されるかと思しますので始めたいと思います。

最初に、本日の議事録署名委員を指名したいと思いますけれども、前回、江成委員にお願いいたしましたので、五十音順ということで、次の小野田委員にお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。

小野田泰明委員

はい。

大滝精一委員長

ではよろしくお願いいたします。

続きまして、議事に入る前に定足数等の確認を行いたいと思います。

事務局から報告をお願いいたします。

折田総合計画課長

それでは、事務局から報告をさせていただきます。

出席者でございますけれども、ただいま6名の委員の方にご出席をいただいております。定足数を満たしていることをご報告いたします。

なお、お二人の委員については後ほどいらっしゃるということでご連絡いただいております。

続いて、資料の確認をさせていただきます。席に座席表、それから次第、資料一覧の表と、それから資料1から4、それからお預かりしております資料のファイルを置かせていただいております。資料の不足等ございませんでしょうか。

それでは、事務局からは以上でございます。

2 議事

(1) 現行基本構想の検証について

大滝精一委員長

それでは、早速議事に入りたいと思います。

まず、議事の第1の現行基本構想の総括についてです。皆さん方から前回ご議論いただきまして、こちらのほうからそれに基づいて現行の基本構想の総括に関して事務局から資料が提出されていますので、まず事務局から説明をお願いして、その後に委員の皆様方から質問や事務局の総括へのご意見をいただきたいと思います。

それでは、事務局のほうから説明をお願いいたします。

伊藤企画市民局次長

それでは、資料1と2に基づきましてご説明させていただきたいと思います。

前回のご議論も踏まえ、市内部で現在の基本構想の総括作業を進めてまいりました。具体的には資料2をご覧くださいと思いますけれども、現在の基本構想の体系、そしてまた具体的な施策の基本方向の記述内容に沿いまして、本市の各局・区の次長クラスにおきまして議論を重ねてきたところでございます。

資料2をご覧くださいと思いますけれども、検証作業の内容を簡単にご説明させていただきます。まず、この表の項目でございますように、基本構想の都市像、都市像にぶら下がる施策体系、そしてそれに沿った具体的な施策の方向性、これが一番左端に記述されてございます。そしてその隣の左から2つ目の欄でございますが、この基本構想を策定した当時の時代認識、これは当時の審議会の資料とか、そういったものを踏まえて事務局でまとめさせていただいた、当時の時代認識がこのようなものであったということを基本的に押さえているところでございます。

この間の具体的な施策、取組として、中ほどに実績や主な取組ということで、このいわゆる10年間の実績を一応踏まえ、現在の時代認識として、この10年間の取組でさまざまな状況の変化がある中で、今日的な時代認識に基づきながら整理しているのが右から2つ目の欄でございます。

こういった当時の時代認識と現時点での時代認識、その違いが比較的浮き彫りになってございますので、それらを踏まえて、では今後、基本構想を検討していただくに当たって、どのような着眼点を持ったらいいのかということ、ややミッションを超えた部分かもし

れませんけれども整理をさせていただいたのが、一番右の検討に当たっての着眼点という欄でございます。

それで、資料1でございます。

まず、現行の基本構想の組立てでございますけれども、大きく4つの項目になってございます。ひとつは策定の趣旨、それから2つ目に都市像、3つ目に施策の基本方向、4つ目として基本構想の推進という、そういう組立てになってございます。この資料1はそれらの項目に合わせた記述をさせていただいております。

まず、ひとつ目の策定の趣旨でございますけれども、ただいまご説明申し上げましたように、検証作業などを通して得られた新しい時代認識、これは10年間の時間的な変化に伴う認識の変化に合わせて必要な見直しを行っていく必要があると総括的にとらえています。

現在の基本構想の策定の趣旨をご覧いただきながらお聞きいただきたいと思いますけれども、例えば超高齢社会ですとか少子化ですとか、現在の基本構想におきましても一定程度の予測はできていたわけですが、こういった社会情勢の変化に対しまして、ここ10年間でこういったものがより進んでいるかですが、例えば格差が、これは人間同士の格差のみならず、都市間あるいは国と国との間、そういったものがより実感を伴っているのではないかと、格差社会とよく言われますけれども、そういった格差化に対して、より共生の社会という方向に向いていくべきなのではないかと、そういった観点ですとか、あるいは環境の問題、これもより切迫感を増しているのではないかと、さらには起草委員の皆様からご議論をちょうだいしていたところですが、成熟社会における新しい成長エンジンというのが必要なのではないかと、あるいは社会資本を新たににつくっていくということよりもアセットマネジメント、そちらのほうに展開していくべきではないかと、そういったさまざまな指摘がありまして、こういう観点から策定の趣旨そのものも見直しを行っていく必要があるであろうというところまであります。

2つ目の都市像についてです。

もう十分ご議論をちょうだいしているところですが、現在の分類は、本市における歴史的蓄積として健康都市、杜の都、東北の中核都市としての機能、学都、という4本の柱から導かれているもので、次の基本構想においてもこれを基本にとらえていくべきではないだろうかというのが、我々の検証作業の基本的認識となっております。

ただ、これも皆様からこれまでもご議論をちょうだいしていた部分でもございますけれども、地球環境時代を先導するとか地球的交流の要あるいは世界の学都、こういった表現については見直しが必要なのではないだろうかというのが、事務レベルにおいても大きな声として出てきたところでございます。

それから、3番目の施策の基本方向についてです。

これは先ほどの資料2をご覧いただければご理解いただける部分かと思いますが、ここでは大枠だけお話を申し上げます。

将来においてもこの施策の基本方向については妥当するものであろうというところをいたしておりますけれども、時代認識のずれがかなり詳細に記述されておりまして、ご覧いただいてもおわかりのように、所要の見直しは一定程度必要であらうと。加えて体系

的な見直しが必要なものがあるのではないかとということで、ここに3つほどまとめて記載させていただいております。

ひとつは、資料2の2ページ、中ほどでございますけれども、ひとつ目の都市像の大きな柱のひとつになっております地域社会の形成についてです。これについては地域社会の形成に向けての拠点づくりというのが進んだ状況でございますけれども、他方、最近NHKでもキャンペーンを組んでおりますけれども、無縁社会という、そういう言葉に象徴されますように地域の連帯感、人づき合い、そういったものの希薄化というのが進んでおまして、そのような意味においてハードではなくソフト的な施策、あるいは行政の施策というよりも地域、団体、NPO、そういった地域力といいますか、そういった力を活用した取組というのが必要になるであろうと。そのような意味において、現在のこの基本構想の地域社会の形成のところをもうちょっと体系的な見直しをしながら記述していく必要があるのではないかと議論になっています。

2つ目です。これは資料2の5ページですが、2つ目の都市像の中で環境の体系についてです。循環型都市づくりという大きな項目がございますけれども、これについては、今日においては循環型都市づくりというのは、持続可能な都市づくりという上位の概念に基づいて低炭素、それから自然共生、そういった取組と並列的に取り組むべき課題として位置づけられているということを踏まえた体系の見直しが必要ではないかという議論になっています。

資料2の8ページのところですが、これは3つ目の都市像、中枢都市という部分の4つ目の柱になります都市構造の形成の部分です。8ページから9ページに記述してありますが、この都市構造の形成につきましては、時間経過による都市、地域の変化、これが今後も生じるということを念頭に置いて体系を含めた見直しを進めていく必要があるのではないかと議論になっています。

この10年間を振り返ってみましても、例えばその商業機能といったものがかなり郊外、縁辺部への展開が進んで、都心の活力が総体的に低下しているというような状況ですとか、あるいは郊外住宅地での質的な環境の変化、そういったものも見受けられると。いわば10年前に目指していた姿とはやや異なる様相を呈してきているような状況にあります。そういう意味からすれば、こういった変化というのは今後も起こり得るということをしっかり見据えた上で、体系的な見直しをしていく必要があるのではないかとという考え方です。

そのほかにも、体系の見直しとかいろいろ議論されている部分はございます。説明が遅れまして申しわけございませんでしたが、体系的な見直しに関しての記述をちょっと見にくいかもしれませんが、斜体で表現させていただきました。下に注意書きがございますので、もう既にご了解いただいているかもしれませんが、そういうことです。

それから最後、基本構想の推進の部分です。これは現在の基本構想をちょっとご覧いただければと思いますが、この資料でいえば最後の6ページになります。ここは構想の推進として3つの項目を掲げております。

ひとつは市民主体の都市経営です。現在の基本構想では構想の推進に位置づけておりますけれども、これをより強く打ち出す必要があるのではないかとというような議論がございました。現在の構想の推進の中の記述も、やや表面的記述に終始しているような嫌いがご

ざいます。市民という言葉ひとつとっても、市民一人一人なのか、あるいは地域、地域団体、NPO、企業、さまざまあるかと思います。この文章からではなかなか読み取れないかもしれませんが、そういった役割ですとか具体的な活動主体の構図、そういったものをより明確化していく必要があるのではないかというような観点での議論がありました。

それから、2番目の創造的な都市経営ですけれども、これについては資料1の中で詳しく書いてありませんが、実は創造的な都市経営と言いながら、その表題と中身が必ずしも一致していない部分もありますので、この辺は少し項目立ての工夫が必要ではないかというふうに見ているところです。

基本構想の項目に沿った総括的な議論というのは、以上ご紹介申し上げたとおりですが、なお資料1の裏面をご覧くださいと思います。

その他として2つほどございます。現行の基本構想、基本計画、これは当然のことながら、総合計画ですので市の施策を網羅的に体系化しているというのは当然のことですが、他方この施策体系とか、あるいはそれを施行した組織体制では十分対応し切れない課題というのが出てきていると。

例えば、ここに記載させていただいておりますけれども、NPOですとか若者、介護予防というのは健康寿命延伸というような観点での取組、これも健康福祉局から提起されておりますけれども、そのほか東西線まちづくりの関係、郊外住宅地のあり方の問題とか、単一の組織あるいは単一的な体系だけでは十分な対応ができない、そういう課題が出てきております。したがって、こういう観点に立ったときに、内部の議論におきましては、基本的には基本構想の現在の施策体系を維持しながらも、基本計画レベルにおいて組織横断的な対応が求められる施策というものを位置づけて、その推進体制の構築にも留意しながら記述していくべきではないか。総合計画全体として見たときに、いわば縦軸と横軸を組み合わせると立体的な施策体系を示すことができるように工夫すべきではないかという議論になっています。これが1点です。

あと2点目としては、基本構想としての記述レベル、それから基本計画としての記述レベル、それぞれレベルというのがあろうかと思います。その観点に立って基本構想を改めて読み直してみたとき、今回改めて基本構想を読み直した職員が随分いるわけなんですけれども、そういうとき、やっぱりちょっとこれ細か過ぎるよねというようなそういう議論もありました。もうちょっと基本計画に落としてもいい部分ってあるのではないかという、そういうレベル合わせをきちっとやっていく必要があるのではないかというような議論がありました。

以上が総括作業の概要です。

なお、資料3をつけさせていただいておりますけれども、現行基本構想の都市像概念図ということで、これは大体4つの都市像に結びつくその歴史的なつながり、あるいは本市における歴史的蓄積、さらには21世紀の潮流、そういったものを見据えた上での現在の4つの都市像というものの位置づけ、概念がこういうふうに流れているんだということを整理した資料です。これもあわせてご覧いただきながら、今後の都市像のあり方のご議論をちょうだいできればと思っておりますので、よろしくお願いいたしますと思います。

以上です。

大滝精一委員長

どうもありがとうございました。

今、資料１から３に基づいて説明いただいたわけですが、ただいまの説明や資料の内容につきましてご質問、それからこの総括部分は見直すべきではないかといったような総括内容へのご意見などがありましたらご発言をいただきたいと思います。

一通り疑問点とかご意見いただいた上で、この後、一応資料１に従って基本構想をどんなふうにしていったらいいかについての事務局としての見解とか、総括の仕方というようなことについては既にご提案をいただいているので、これについてもこういう方向でよろしいかどうかを確認していくことが、今日の主な起草委員会のテーマになっていると思いますので、そちらのほうに進めていきたいと思いますが、とにかく、今、お話しいただいた、こういうような総括の仕方とか見解でよろしいかどうかということです。その確認とかご質問、ご意見をいただきたいと思いますのでよろしく願います。

では、皆さんご意見出ないようですので、私のほうからひとつ最初に確認をしたいんですけども、この資料１の最後の、先ほどご説明していただいたばかりのところ、その他のところで組織横断的な課題ということで、そこに幾つかテーマが上がっていますね。そのところで言っている縦軸と横軸というのは、これはどういう意味合いで言っているのかということの確認なんですけれども、ここに横断的な課題というふうに掲げているものそのものは、主に基本計画のレベルで扱いたいということのお話なんです。その話と基本構想というのと、どこでどういうふうにかかわってきて、何が縦で何が横なのかということの確認をしておきたいんですけれども、いかがでしょうか。

折田総合計画課長

ご質問の点でございますが、ここの５番目については、我々の事務局としての前提の上に立った５番目の話でございますので、少々解説が要るかと思いますが、我々の今のところの議論の中では、現行の都市像の体系については４つの都市像がございまして、その下に施策の基本方向があつて、それに基づいて基本計画、実施計画とございますが、ここの大きな組み立て方については現状どおりでいいのではないかと、多少、時代に合わせて体系に見直す部分とはご説明したとおりでございますが、基本的にはその縦軸については今のままでいいのではないかとというのが我々の今のところのひとつの議論でございます。

その前提に立ったときに、では、現行の政策体系でもって、我々、日々仕事をしているわけですが、その政策体系でとらえ切れない今日的な課題、あるいは今後１０年間程度見たときに重要なテーマになってくるであろうというものについては、基本計画レベルで横串のプロジェクト的な扱いにして、パッケージとして政策的に示したほうが、我々役所というのは縦割りの組織で仕事をいたしますので、その仕事をする立場からすると、そういう政策パッケージが明示されていると非常に目的も明らかになっていて、自分たちが何をすべきかということも含めて明確になるのではないかと考えて、一応、頭からおしりまで考えたものがこの５番に立っているわけです。これについては当然この起草委員会において、都市像を今後どうしていくべきかというご議論が先にあってしかるべきだと考えて

おりますので、もし仮に、都市像レベルできちんと位置づけていくべきだというようなことがあれば、当然その例示の部分の中身については変わってくるものと考えておりますので、まずは前段の部分でひとつご議論いただいた後に、その横串の問題をどうとらえていくかをご議論いただければというような思いで書かせていただいています。

ちょっと説明が伝わりにくいかもしれませんが、とりあえず事務局からは以上です。

大滝精一委員長

はい、わかりました。イメージとしては、今、ご説明いただいたように、縦のところが4つの都市像というので、この4つの都市像自体は基本構想の中でうたわれることで、それからここに書いてある横断的な課題というふうな形で、NPO協働というようなところから幾つか出ているわけですが、そのところはそういう4つの都市像を横断するようなテーマとして、基本計画の中でむしろ実際の政策的な課題として横断的に取り組んでいくという、そういうようなイメージでとらえているということによろしいんですね。

伊藤企画市民局次長

イメージは、まさに委員長がおっしゃったとおりでございます。ただ、ここに例示的に上げさせていただいているのは、総括作業の中で実際に各次長レベルからの議論が出されたものを出させていただいているにすぎません。より組織横断的な課題として、本市として重要なプロジェクトとして位置づけて、横串を通してやっていくべき施策かどうかという議論はいたしておりませんので、レベル差もございます、ご覧いただいて多分わかりだと思えますけれども。そういう意味では、こういう観点で議論が出たというのを紹介させていただいているにとどまっておりますので、そこはご理解いただきたいと思います。

大滝精一委員長

はい、わかりました。

では、もうちょっと前段の議論を少しきちんとやった上で、こちらのほうにもし必要があれば入っていくという、そういう形でよろしいですね。では是非、その前段のほうをお願いします。ご質問等が、ここはどうだということがあれば。

柳井先生、お願いします。

柳井雅也委員

横串の議論は、先回私も、何かお話しいただいておりますので、今日の説明でよくわかって、効率的な運営というところにもかかわってくるのかなと思って伺っておりました。

それで我々の目標は、結局、仙台市民が主人公となって、その中でどういう都市構造の中で我々が機動的に動けるかということなんですよ。そのとき、いろいろなぶら下がりとして世界都市としての役割もありますし、福祉の問題もあるし、産業育成とかも入ってくると思うんです。だからその都市構造のあり方を幾つかのキーワードできちんと示しておく必要があって、私なりに考えるのは、やっぱり人が主人公という前提なんですが、構造がフレキシブルであるということと、あと距離が短いということです。そしてあと機動

的に動かせるという、こういったところにいろいろなものがぶら下がっていきんだらうと思っています。

それで、その距離が短くというのはどういうことかという、地理的な意味でいわゆる時間距離、あと相対距離というんですか、交通機関を活用して時間を短くしていくとか、そういった距離を短くしていくということでやっていくわけなんです、例えばその具体的なレベルで産業というところに落としていった場合、今までですと、どこでその産業を育成していくかという議論が意外とあいまいになっていたために、これは実行計画、基本計画なんかで議論されることだとは思いますが、多少、基本構想の中で少しその地理的な問題をどう考えていくのかということを入れていく。

あるいは、この4つの柱の中に中枢都市の機能と学都の知的資源というのがあるんですけども、実は産業という切り口でいくと両方にかかわってることがあるんです。つまり知的な資源についてはスピルオーバー効果というのが出てきますから、当然、知的なもので収れんするだけではなくて、実際応用技術とか、実際に使われるいろいろなノウハウというのが地域に移転されていくプロセスというものも含んでいるわけですよ。そうするとこういったものがどこに入っていくのかというのがわかりづらいところがあるんで、その横串のところ、そういったことももうちょっと付加的に説明しておくと、例えば東西線の問題にしてもその経済効果とか、昨日ちょっと話題になったアンパンマンミュージアムが、単にその施設が配置されるというだけではなくて、地元の経済効果とか観光にどうかかわっていくのかという視点も出てくると思うんです。

だから、そういう横串のところをもうちょっと説明を入れていただけると、もうちょっと内容を豊かにしていただけると、今言った距離の問題とか機動性とかフレキシブルとか、そういったものがうまく説明できるのかと思っています。

だから今日議論していくとき、これ、今、産業についてお話しさせていただいたんですけども、キーワードとその重なりぐあいのところを少し詰めておいたほうがいいのかという感じがしております。

以上です。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

今日、恐らく話すこと自体は、ここに上がっている特に資料2のように、ものすごく細かなところまで、今、検討されていますので、恐らくこのひとつひとつを全部取り上げてというような作業は、また後でちょっとご提案しますけれども、この後の作業でやっぱりやっていかざるを得ないと思いますし、職員の方も含めて、たたき台をある程度つくりながら進めていくということだと思いますので、今、柳井先生のほうからもお話があったように、少し大きなやっぱりこういう構想のまとめ方とか切り方とか、あるいは、今、お話があったような少しクロスするとか、あるいは現状でも同じような問題が2か所に出てくるような問題をどう考えたらいいとか、そういう大きな視点とか論点を出していただくというような、そういうことがいいかというふうに思うんです。

今のキーワードを上げていくというようなこと、それからそれをどんなふうに位置づけ

ていくのか、それから、今、柳井先生がおっしゃられたように、クロスしたりするところとところでどうということが議論できるかとか、そんなところが大事かというように思いますね。

どうぞ、ほかの委員の皆さん方からもご意見をいただいて。今日は何か結論をここで出してやりますよという話でも必ずしもないので、このたたき台に対して、さらにもっとこういうところをというようなご意見をいただければいいかと思います。

柳井雅也委員

細かい話なんですけど、高齢者のところは昔の現状認識から随分やっぱり進んでいるという感じがあって、ひとつ、多分これからかなり、僕は今日の話の中でこの地理的な位置の問題とか、僕たちの世界ではフリクションという言い方をするんですが、地理的な摩擦をどう解決していくかという問題の中のひとつとして、例えば高齢者の問題でフードデザートという問題があって、買物に行けない高齢者が多数出てきているんですよね。これもやっぱり10年間で随分問題意識が変わってきているのかという感じがしますので、もうちょっとそういった高齢者の問題を深掘りしたような考え方をこの基本構想の中に、ただ単にまとまっていくとか支援をしていくだけではなくて、もうちょっと立ち入っていった方がいいのかという感じがしております。

大滝精一委員長

どうぞ。ほかにいかがでしょうか。

間庭洋委員

感想でもよろしいですか。

大滝精一委員長

ええ、もちろん結構です。

間庭洋委員

4つの柱でもって、今、検証したお話がありましたが、ちょっと感じとしてはその4つの柱でやることで、柱のほうはわかるわけなんですけど、前から出ている横串なんですけど、やっぱりテーマの相互関連性が非常に密接になってきているのが、10年前以上に今回の着眼点などを見ると、かなり横断的、連携性を求めるものが非常に多く相互関連性が深まっているという印象が非常に強まっております、例えば1のところでは市民の視点での話があったんですが、ずっと横串的な視点で見ると、例えば学都のいろいろなそういうものが4番目でありましたですけども、学都を形成すること自体が目的なわけではなくて、それを通じて仙台の将来の都市像を形成していきたいということの言葉だと思うんですけども、そこに当然出てくるのは、この間来から出ているように、例えば柳井先生、大滝先生からも出ていたように、仙台で学んだ若者が仙台に住みたいけれども、就職する機会が少なく、例えば工学部でいうと10%以内の人しか残らないとか、また文系であってもその

程度だというふうな話などもあって、もちろん志があって世界に羽ばたくのは大いに賛成なんですが、そういうことからすると、学都というのもどういうふうにしていくかということ、柱を立てる中身をやるときに、やはりひとつの市民という目線が横串的にあると、環境の問題だとか、それから持続可能なという視点ですとか、それから都市構造とかというところでも全部ぶっ通るような感じがしますので、そういったもので4つの柱をつないでいくということなどもイメージとして、資料を見るとわいてくるという感じがいたしました。

そのほかにも幾つか横串的に見られるものもあると思います。市民の生活という視点からすれば、市民は文化とか消費とかという以外にも、やっぱり働く、生産というのも市民の生活ですから、そういった横串も市民という目線の中から出てくるとは思いますけども。

それから、もうひとつあるのは、やはり横串的に考えられるのは、前から出ていますとおり東北と仙台の間柄、東北をいかに仙台との間柄でリードしたり、あるいは支えてサポートしたりしていくかというお互いの協働の関係が、横串的な視点として、4つの柱とも共通したものがあるのではないかと思います。

例えば、一例になっちゃうんですけども、今、東北の中で例えば北東北が特に疲弊している部分があるんです、経済的に。その中でも特に秋田などは中心部の、仙台では藤崎さんとかさくら野百貨店とか三越さんみたいなものに位置する西武百貨店とイトーヨーカドーという真ん中にどんといたものが、どちらも今年なくなるとか、大変なことですね、仙台からそういったものがもしなくなったら。そういうときに仙台と秋田との関係はどうかと考えたときに、やはり東北の中であって仙台がいろいろ役割を持ったり支えられたりしているので、秋田の問題は秋田のローカルな問題だけにとどまらないで、当然仙台にもいろいろな影響が及んでくると、間柄が非常に密接だと我々意識しています。

そういった意味で、では中心市街地を直接支えることはなかなかできないけれども、いろいろなつながりでもってどう支えるかといったときに仙台拠点、あるいは岩手県南拠点にある自動車産業の集積を生かした、例えば秋田港などを使ってシーアンドレールだとか、そういったことでロシアへの、自動車産業の役割を物流その他で果たしていく、生産供給でというような、例えばの例ですけども、いろいろな東北に対する仙台の役割というのは相当、秋田固有の問題だけにとどまらないようなことでつながってやれるという、こういった問題は、産業的な視点だけでとらえるのではちょっと非常に、直接的には産業なんですけども、やはりもっともっと大きな問題が、仙台側にも都市構造その他の支えがあります、それはもちろん学都との関係も、テーマ的に自動車産業で出てきますし、そういうことで横串を刺していくという形で、東北と仙台というものも4つの柱に比較的共通しているものとしてあるというふうな印象などを持ちました。

それから、環境の部分ではやはり循環型ということではなくて、持続可能なという方に軸足を置くのは、上位概念かもしれませんがいいなというふうには思いました。特に私は環境審議会に出させていただいて、そちらでも、今、10年に1回の基本計画策定を開始した中で、論議されているのはCO₂、低炭素化をどうやって実現していくかということのグローバル若しくはナショナルなものもあるけれども、ローカルにはというときに、やっぱり一番大きいのは、仙台など地域におけるCO₂の約3分の1が車などによる排出です。

これはマイカーを除いての3分の1ですから物流だとか旅客だとかなんですが、そういったときに東西線の問題だとか総合交通体系、都市構造の問題などが当然クローズアップされてきているんですし、もうひとつ、あと循環型というものには、つくったものとか、あるものを循環させるとか、あるいは循環させられるようなものをやろうという概念はあるんですが、やはりどちらかというところ、例えばワケルくんのように終末処理的なものが環境問題で今まで大きかったんですが、そうではなくて、もう入り口のところ、プロセスのところでもやっていかないと、こういう目指すものはできないねという議論が出ていましたので、この持続可能な都市づくりということについては、非常にいい軸足の動かしではないかということを思いました。

以上、ちょっと所感めいた話ですが、あともうひとつ、市民のところ、指摘ありましたとおりやっぱり市民って一体だれなのということが不明なまま基本計画がアウトプットされると、多分そのまま行っちゃうんじゃないかと思うんです。ですから仙台はやっぱり市民といったときにいろいろな担い手、プレーヤーがたくさんあるということと、その人たちが力を合わせるということを明確にしていくという、さっきのご説明はいいというふうに思いました。

以上です。

大滝精一委員長

ありがとうございました。幾つかの論点を提起していただきまして大変参考になりました。

どうぞ、西大立目さん、お願いします。

西大立目祥子委員

都市像についてなんですけれども、私自身まだよくわからないのですが、もちろんこういう4つの柱というのがあって、それはある意味、伝統的に仙台の中で4つ、こういう都市にしたいということで長く使われてきたものだと思うんですけれども、これからのゼロ成長時代であるとか、先ほど出た無縁社会というもののの中に生きる私たちのこれからとか、何か戦後の日本では経験したことのないようなことがやってくるこれからの10年、20年という重たい屋根が、この4つの柱だけに乗っかるのかというのが、ちょっと私は心配です。

では、もう1本、2本、何か柱を足すのに何がいいんだというふうに問われるとはっきりわからないんですけれども、私は何か市民活動というのが戦後、特に脱スパイク運動あたりからは、健康都市でもありましたけれども、仙台ならではのものだと思うので、何か経験したことのない時代を生きるための補強するための柱というのが入ってもいいんじゃないかという気がしています。でないと、新しい時代のための新しい総合計画であるにもかかわらず、何か4つ柱があってその下に実施計画までぶら下がってくるということを考えると、もちろん横断的にプロジェクト的に横軸で入ってくるものはたくさんあると思うんですけれども、基本的なところが変わらないということになるので、その辺はもう少し検討の余地があるのではないかと思います。

大滝精一委員長

ありがとうございました。これはすごく大きな問題で、この4つだけでいいだろうかというお話ですよね。それから、今、お話があったように大分これまでの、少なくとも高度成長期から低成長に移ってきてというところまで来て、一応10年前もこういう4つの柱で来ているということがあって、前回から大きな基本としてはそういう方向でもいいんじゃないかということもご意見としてはあったんですけども、ただこれで本当に十分かどうかというような問題です。

特に、これから仙台もかなり大きなチャレンジがたくさん待っているわけで、そのチャレンジに対して、ここで掲げている4つで必要十分な都市像の条件になっているかどうかという。そのあたりの議論は、これも今日、別に決着をつける性格のものではないんですけども、今、西大立目さんからあったようなひとつの意見としては、そういう市民活動とか、市民自体が自分たちで動いていくというようなことを都市の原動力みたいなものにしてきたというような動き、そういうようなものをもう少しこういうものの中の柱に加えてみたらどうだろうかというようなご提案のようなものだったかと思うんですけども、どうぞ。

柳井雅也委員

こういう基本構想を考えていくときというのは、与えられた所与の条件をプリミティブに受け継いでいくというやり方、改良とか改造を加えてやっていくというやり方と、あともうひとつ、やっぱり新しい条件を追加していくというやり方があるんだと思うんです。

僕はちょっと確認しておきたいんですが、僕は一生懸命いろいろ考えていたこと、例えば国際化の問題であるとか観光の問題だとか、この中でどういうふうにするのかと自分なりにねじ曲げながらずっとやってきたところがあるんですけども、要するにこの4分類というのは金科玉条のように動かさないほうがいいのかどうかという議論は、実は余り本当の意味ではしていないんですよ。だからもしもこれを変えてしまうと、例えばこの仙台市のいろいろな組織が動かなくなってしまうとか、あと何かいろいろな問題が出てくるというのでしたら動かさないほうがいいと思うんですよ。ただ、変えても全然それは問題ない、むしろ組織がそういうふう柔軟に変身していけるんだとしたら、もうちょっとここを見直しをやっておいたほうがいいのかというふうに思います。

大滝精一委員長

今の柳井先生の意見についてはいかがですか。なかなか事務局も今の質問に対してはストレートに答えにくいのかもしれませんけど。

伊藤企画市民局次長

都市像につきましては、内部でもかなり議論はございました。ただ出発点として、やはり仙台の歴史的な位置というものを考えたときに、現行の基本構想の理念、都市像の方向性が、余りにも我々にとって動かしがたい大きな存在であることは否定できないわけで、

そういう意味では、ある程度これを前提に議論が進んできたようなところがございます。中には積極的に、せっかく総合計画をつくるんだから、新しい軸足を持って描くべきだという議論もないわけではないんですけど、ただ内部においては、この総括、検証作業というのは次長級の作業だったんですけども、その上の組織として本部会議がございますけれども、本部会議の中でも、やはり議論としてはこれを基本的なものとして据えていく、それは必要なことなのではないだろうかというような、丸めて申し上げればそのような方向性がございます。ただ最終的なご判断というのは、やはり審議会に当然ゆだねられている部分でもございますので、審議会のご議論は十分尊重しなくてはならないと考えている、そういうのが若干、少し本音をにじませながらの公式な見解というところなのではないかと思います。

柳井雅也委員

もしも可能だったら2点ほど僕は意見があるんですけど、ひとつは、先ほど間庭委員からも出ていましたように、仙台市民像というのをもうちょっと強く打ち出していくということですよね。これはもう大きな柱の、この4つの柱のもっとベースに当たる部分だと思うんですが、よくよく考えてみると、仙台市というのは仙台町人の七夕のあの伝統を受け継いでいく力とか、あと東北大学のいわゆる研究第一主義とか、あと先ほど出ていたスパイク運動にしても、結構1個のテーマをきちっと決めると、市民が一丸となって粘り強く対応していく力はあると思うんです。これをもしも仙台の人間性に置きかえらるとするならば、そこをもうひとつ強調していくということです。その上でその4分類はどう乗っかってくるかという議論を、本当はしておく必要があるのかと僕は思っています。

それで、あえて言わせていただくと、やっぱりこの急激な国際化というものもひとつ大きなキーワードとしてあって、今、東京の銀座あたりへ行くと、もう外国人多いんです、すごくて。山手線に乗られてもわかると思うんですが、仙台も早晩、そこまではいかないかもしれないけども、かなり観光客、あと東北大学の国際化という中で増えてくる可能性があるんで、そこへの対応をやっていく中で、むしろ仙台の拠点性を東北の中でどう位置づけていくのかとか、その辺の議論も少しちゃんとしておいて、どこかにぱっと入れておかないと、地球という言葉が仮に否定されても、そういったグローバル化とか、何かそういった言葉をもう少しどこかに忍ばせておいたほうがいいし、場合によってはこれを柱のひとつに加えたほうがいいんじゃないかと思っています。

大滝精一委員長

今の西大立目さんと、それから柳井さんのお話、ちょっとかわりがあると思うんですけども、この都市像の頭のところに「市民主体の創造的な都市づくりを基調に据え」という表現が出てくるんです。この市民主体の創造的な都市づくりというのを、何かもうちょっときちんと表現するとか丁寧に表現する、要するに市民主体の創造的な都市づくりというのが一番ベースのところにあって、そこから4つの都市像が出てきますよという話をしているわけですよね、基本的には。その市民主体の創造的な都市づくりというのが、これ一番後ろにも何かそういう話が先ほどあったんですけど、そのところがちょっと全体と

して上滑りしているという感じ。

それで、西大立目さんの話なんかだと、やっぱり市民主体という話がもっと前面に、もちろんその市民がだれかという話は、あるいはだれがプレーヤーかということはあるんだけど、そもそも市民主体の都市づくりとは何だというような話自体が余りきちんと議論されていないし、それからさっきも言っていた創造的なのということの意味が何だということも余り議論されないで言葉がずっと出てくるということなので、ここの議論は少しきちんと深めるべきかなという感じはあるんです。

だから、ここだけでいいかどうかは別問題で、今、柳井さんもおっしゃったように、そもそもの仙台の市民像とか、それからもし仮に、もう少し市民の創造性とか市民の活動のイニシアチブとかということを都市づくりそのもののベースに置いて、新しい挑戦にチャレンジしていくという、さっきの西大立目さんのような議論をもっと前面に出していくとすれば、このあたりのところをもう少し皆さんでいろいろ意見を出し合って深めていくような、そういう論点が必要かと思うんですけどね。

柳井雅也委員

ちょっとよろしいですか、それについて。

大滝精一委員長

はい、どうぞ。

柳井雅也委員

結局、都市を仮にポリスというのに置きかえた場合、ポリスの理想はどういうものかという、人間の脳の中で描いた理想の空間的な現象形態が都市なんですよ。だからこれが一致するというプロセスを限りなくやっていくことが都市づくりに当たるわけですよ。したがって、その市民というものをきちっと定義づけさえしてしまえば、この分類の仕方とか、都市がどうあるべきかというあるべき論も出てくるはずなんです。そのときクローズドな世界での、前のこの計画、クローズドなきれいな世界というように僕は理解していて、それからもうちょっとドラマチックにオープンな世界との関係というのが、今度の基本構想の考え方になっていくだろうと思っていたんですよ。だからその市民像をもうちょっと明確にするというのが大事だと思いますね。

大滝精一委員長

それから、柳井さんがおっしゃったように2つ目の、特にこれも国際化という言い方だけでいいかどうかはちょっといろいろ問題があると思いますけれども、要するに仙台の持っている中枢性のようなものをどういうふうに考えていったらいいかというところの論点、これは私も同感で非常に重要だと思うんですけども、それを地球何とかというような言い方、あるいはいきなり世界都市とかという、そういう表現に近い部分もこの中には出てくるんだけど、そういう言い方にしちゃっていいかどうかということについては、相当、もうちょっと議論が必要だと思うんです。

やっぱりちょっと世界都市というにはいろいろな意味で仙台が置かれている今の現状とか、それからこれからむしろ例えば50年後でいうと77、8万くらいですか、この間の予測でいうと、そこまでずっと人口が落ちていくわけですから、その中で世界都市性とかという話になってくると、これはよほどの何かがないとちょっと言葉に負けちゃうというような話もあるので、その辺の議論はそういうような、要するに地球規模とか世界都市を目指すとかというような言い方とか表現とか、それから表現だけではなくて、その内実をちゃんと伴うようなものになるかどうかというようなことについては、何かもうちょっと議論があっていいですね。私もそう思います。

どうぞ、それでは小松先生、小野田先生あるいは江成先生のほうからも、もし何かコメントがあったらお願いいたします。

小松洋吉委員

よろしいですか。

大滝精一委員長

どうぞ。

小松洋吉委員

お伺いしていて大変勉強になりました。私は都市像の4つというのは、どういう形かは別ですが、やっぱりこれは残したらいいのではないかなと思うんです。ただそのレベルとして上なのか、私はいつも21世紀型市民の育成ということを通じてきたんですが、今、21世紀の仙台の市民像と言いましたか、それと全く同じような感覚であります。それをこの4つの上のほうに何か表現、これに実際には小さくですけど表現はされているわけで、4つの都市像とリンクしたような格好で今回の計画ができれば非常にいいのではないかなという気はひとつ受けます。

先ほど、先生は高齢者云々と言いましたね。こういう計画はそこまで踏み込んでも私はいいと思うんですよ、踏み込めればなおいいと思うんですが、また高齢者関係は高齢者関係の、福祉関係の計画書は別途あるわけですね。そこら辺はどこまでこの基本計画に盛り込んだらいいのか、極端なことを言うと、全部盛り込んでしまえばほかのものは要らないみたいな。極端な言い方ですけどもなってしまうと思うんですね。それぐらいの感想でございます。

大滝精一委員長

ありがとうございます。

では、江成先生。

江成敬次郎委員

すみません、今日、遅くなって参加させていただきました。

実は、事前にはこの検証資料を読ませていただいて、特に環境の部分のことについてち

よってチェックはしてきたんですけども、今の議論を聞いていますとその前段の議論という、そんな感じがして、私自身お聞きして4つの都市像に加えて何か別の柱とかというふうなことが必要なのではないかとか、そういったニュアンスの議論という形でお聞きしたんですが、内容をちょっとお聞きしますと、私自身はその4つの柱の土台になることについての議論なのかというふうに、実は聞きました。

市民主体の創造的な都市づくりとかという言葉も出てきましたし、市民像、21世紀型市民の育成というそういった言葉も出てきましたけれども、4つの柱を、その共通する土台についてのやはり何かイメージといいますか、構想というか、そういったものをやっぱり出す必要があるのではないかと。それを5番目の柱にするのかどうかということについて、大きな意味では人材育成というのも都市づくりのひとつだという言い方はできるかと思うんですけども、私のイメージとしては、その4つに共通する土台の部分に目を向けることも必要ではないかという、そんな感想を持ちました。

土台というのか、4つの柱ですと、1本1本柱が立っているわけですけども、それに、いわゆる耐震性を高めるために筋交いを入れるという意味での、いろいろな市民の育成とかということが出てくるのかという、そんな気がいたしました。いわゆる横串を入れるとか、そういった視点というのも、そういう意味では同じようなことなのではないかとか。ただ、それをどういうふうに位置づけて、あるいは盛り込んでいくのかということなんですけど、ちょっと口はばったような言い方かもしれませんが、4つの柱でもって10年間やってきて、それでやっぱりその柱を延べているだけではなかなかうまく進まないよと、その共通の土台、土俵というものをやっぱり育成していくということも必要だよということがわかってきたというのが現状なのかという気がしているんですけども、そういう意味で、1本を柱にするかどうかということになると、教育の問題とかもかかわってくるような気がするんですけど、私自身は、ほかの4つの柱と比べると、やはり共通の土台かと。その土壌を肥やすための何か構想を盛り込むということのほうが素直かという、そんな気がいたしました。

すみません、ちょっとこの資料の中の簡単なことなんですけど、実は何か所かイタリックの活字になっているところがあったんですけど、このイタリックの活字になっているところは、何か意味があってイタリックにしたんでしょうか。

折田総合計画課課長

斜体の部分だと思いますが、斜体の部分は、基本的にこのつくりは普通のゴシック体で書いてあるのは、今の施策の基本方向の枠内で議論がおさまるものについては普通のゴシック体で書いておるんですけど、それを超えるもの、この体系の組み直し、あるいはもう少し横断的な議論が必要ではないかというようなものについて、斜体でお示しさせていただいているということでございます。

江成敬次郎委員

わかりました。ありがとうございます。

大滝精一委員長

よろしいですか。

(小野田委員が手書きメモを配布)

それでは、これ、小野田先生のほうから。先生、ありがとうございます。

小野田泰明委員

すみません、汚い字で。

私も議論に4回ぐらい参加させていただいて、最初は健康、杜、中枢、学都という4つの区分に何の疑問も持っていなかったんですけども、今、こうやって各4項目の下に何がぶら下がっているのかという確認をしていくと、なかなかこれは非常にかたいというか、結局、最初の大きな4つの項目はいいけど下のほうまで行ってしまうと施策が細かくそれぞれにぶら下がっていて、言葉は悪いですけども、縦割りを是認しているような、これではあまり変わらない、ここでかなり濃い議論をしたことが余り反映されてないではないかという印象を受けました。むしろ、この4つで分けている構造に問題がある。いや、もしあると仮定したらどういうことが代案として考えられるんだろうかと仮想的に考えてみた図がお配りしたものです。

ここで議論されている4つの柱というのは、後ろのほうに来ると個別の話になりますが、前段、丸数字まではいわゆる憲法みたいなものですよね。この基本構想に求められているのは。行政的には憲法だということだと思いますが、もうちょっと、21世紀の厳しい状況にひいひい言っている市民からすればアクションプランというか、何かそういうもののほうがいいんじゃないかというふうに、頭を切りかえる必要があるだろうと思いました。

それで、何が物事を阻害している要因なのかから考えました。丸で囲ってちょっと黒く塗っているところです。黒いのはそれぞれの関係領域ですけども、まず右側に、やっぱりここでずっと議論されてきてかなり中核を占める議論として、大滝先生、西大立目さんを中心に論が張られた、仙台型市民参加社会の実現を提示してあります。それをなす主体は、行政単独ではなくコミュニティビジネス、地域ビジネスであり、エンフォースメントされたNPOです。

要するに、今までの行政という組織の外形を揺り動かすような、そういうことをちゃんとやらなければいけないというのがこの場では明確に提示されていたと思います。その裏側の概念として、町内会とか、郊外団地とか、そういうまちレベルに下りたときに、一体どういうふうに展開できるかということで掲げたのが、自律できる地域クラスターというやつです。その地域で子育てもできるし、地域で高齢者も生きがいを発揮できるし、地域でも教育できるしという、地域から発想するような視点というのがやっぱりあるべきだと。これは、仙台は都心と郊外が非常に近い関係にありますから、多摩と港区みたいなもうどうしようもないような話ではなくて、それが相互に移行できる、そうすると、やっぱり地域の自立のあり方というのを比較的考えやすく、そういう社会がつくれるだろうと。

これは、組織側から見るか地域側から見るかという裏表だと思いますけれども、この右下の地域側から見たとき、自立できる地域クラスターというのが何を言っているかという、これは圏域が小さくなるから、福祉、教育、その他区役所のまちづくりみたいな、そ

ういう組織の内部構造というか、縦割りがお互いつながってこない、これは必ず実現しにくい。つまり、従来の組織の内部構造が、何というか、壊されるべきというか若干障害となることもあるかと思います。

というふうに縦割り組織の問題と直接関連する課題なので、大きい項目で何か掲げておいたほうがいいのかというふうに思いました。というか、先の健康、杜、中枢、学都といった区分には乗り難い、こうした動的な概念を明記してほしいということです。

それともうひとつ、やっぱり仙台、広瀬川があって、定禅寺通りがあって、青葉山があって、魅力ある都心部というのは話の節々にも出てきたし、杜というところの象徴するのはそういうところだと思います。それとあと、郊外では居久根とか広瀬川の上流下流であるとか、上流から下流まですべてを含んでいますから、そういう大きな系と小さな系と。特に、川の中流域にある日本の中では非常に珍しい県庁所在地としての圧倒的に魅力ある都心部を生かして、どうやって 21 世紀にちゃんと生きていくかという柱もやっぱり立てなければいけないだろうと。ここで問題になるのは、自然と人間がどういうふうに生きていくかという領域かと。

それと、その下に書いてあるのは学都といわれる話です。右側のコミュニティビジネスとか自律できるクラスターというのが出てくると、そういうところに定着できるような人がかなり増えてくるんじゃないかというような話ですとか、上のほうの自然の領域についても、同じように定着する人も出てくるだろうと。

それ以外に、ここを中心に展開していくということを考えると、ここを中心にいろいろなところに出かけていく、東京に出かけていったり東北に出かけていったり。東北自身は、先ほども秋田の話のご紹介がありましたけれども、やっぱり東北全体が疲弊していて、特に青森とか、北東北に行くとか疲弊の原因のひとつがやっぱり人材が非常に少ないという、しっかりマネジメントしてきちっと闘えるような矜持を持った人材がなかなかいない。もちろんたくさんいるんですけども、それでもやっぱり量的には少ないというところが問題なので、やっぱり仙台の役割は大きいと。

そうすると、ここで問題になるのは、仙台市という行政の枠組みの中で、語るべき話かという問題が出てきます。スケールというか、領域の制度的な縛りとの闘いですね。それで、それ以外にもそのスケールとの闘いは物理的なスケールとの闘いがあって、人々がどう動くかと、それぞれ自律した地域クラスターをどうつなぐとか、東京と仙台をどうつないでいくとか、そういうところで、公共交通体系ですとかサーキュレーションですとか、それを自然に優しくどうつないでいくかという、そういう物理的なスケールをどう横断するかという話も出てくる。

先ほどの高等教育機関、若しくはそこもシンクタンクになって、東北のシンクタンクであり世界のシンクタンクであり、新しい産業を創出していくんだというような話というのは、知識であり、産業であり、マネーでありという領域ともかかわってくる。

これは思考実験ですから、こうしろと言っているわけじゃなくて、また皆さんのお話に刺激を受けながら、僕の頭で思いつくことを書きなぐっただけなんですけど、もし仮にこういう世界になったらどうなるかというのを考えておくことが、少しお役に立つかと思ってやってみました。

だからといって、事務局が言ったように、健康、杜、中枢、学都で、それを横串というか、パイロットプロジェクトにつなぎますよというのは、やっぱりどうかなあと思っています。パイロットプロジェクトの中に仙台型市民社会の実現とか、東北のシンクタンク、世界のシンクタンクとしての学都づくりとか、そういうのが入ってもいいのですが、やはり問題のかぎになっているのは、組織の外形、やっぱり行政だけではなくてNPOとか地域ビジネスとか、そういう枠をどう越えてやっていくかというのをきちっと示すことではないでしょうか。よく言われることですが組織の内部構造ですね。例えば自律できる地域クラスターをやろうと思ったら、縦割りをやわらかくしなければいけないんですが、一步間違えるとただ混乱するだけになってしまいます。行政にはやはり、法的な裏づけというか、国の制度がやっぱり基本になっているので、そんな簡単には出来ませんし、ここに書いたからできることではないのはわかるし、余りこういうことを行政が書くのは危険だというのも良くわかるんですが、掲げておくのは悪くないかと。

だから、代案として、この右あたりの軸をひとつつくりだすというのも、4つではなくて5つとか、そういうのもあるかということです。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

とにかく、この都市像のことについては、いろいろな議論が私はあっていいと思うし、もう少しいろいろな点から検討していく必要があると思っています。皆さん方それぞれ、みんな一致しているわけでは必ずしもないし、それから、今、小野田先生からご提案いただいたように、少しではなくかなり違うのか、全然違うイメージでとらえていくということも可能だという、これを拝見するとそういう印象も持ちます。ですので、ちょっとこのあたりのところは、まだ皆さん少しこの後も議論を続けていってみたいらどうかと思います。

それで、とはいえ、一応この起草委員会の中で、大体どんな方向で何を検討しているかというふうなことについては、この後、次に2月16日でしたか、そこの中での報告をしないといけないということもありますので、一応今までいただいたいろいろなご意見等については、この後の基本構想の策定においても、できるだけそれを反映していくということで進めていきたいとは思っているんですけども、当面ちょっともう一回もとに戻りまして、資料1、新しい基本構想の策定の方針ということで、起草委員会として基本構想をどういう策定の考え方で議論していくのかについて少し整理をしておいて、次回の2月16日の審議会の中では、それについての中間報告を審議会全体の中でしておいたほうがいいと思いますので、あるいはそうすべきだと思いますので、少しその辺の取りまとめについて、今、こんなことの方で進んでいますという、そういう議論で私はいいと思いますので、そのところについてちょっと皆さんと確認しておきたいと思います。今、議論していますよとか、こういう議論がありますよということの報告でも、それは全然構わないのではないかと思いますので、少し取りまとめをしておきたいと思います。

現行の構想では、先ほど資料1の説明にもありましたように、全部で4つの部分から成っているということがあるので、この4つの部分については、基本的にこの構造を考えておくということでもいいかと思いますが、今、お話がありましたようにこの4つの策

定の趣旨、それから都市像、それから施策の基本方向、基本構想の推進という、この構造というんですか、これについては実は余りこれまでも議論はなかったんですけども、このところについてはいかがですか。このまとめ方ということについては、基本的にこれをベースにして、これからかなり作り直すにせよ何にせよ、このところの構成ということについては、ここをベースにして進めていくということによろしいですか、それとも……。

はい、どうぞ。

間庭洋委員

すみません、前回の1本目の柱の市民のところは、内容的には、何ていうんでしょう、安全で安心な市民生活が健やかに送られるような基盤を形成していきたいというふうな、市民生活にとってはインフラ、ハードもソフトも含めてのインフラ的な要素がひとつ目の柱になっているんです。多分今までの議論というのは、それはもちろんなんですけども、市民のとらえ方がそれだけでは足りないんじゃないかと、もっといろいろな、横断的に言えば、先ほど来、出ていたように文化だとか、それから人のつながりの部分のもうちょっと積極的な意味だとか、それから働くことだとか、いろいろな市民生活の多様性の部分については、1本目の柱には余りないんです、前回の。非常に基本的な事柄だけ、基盤的なことだけが中心で、そこから派生することについてだとか、その上でどう生きるかということについては余りそこでは触れていないんです。

ところが、ここ数回の議論というのは、そちらの議論が結構多かったので、1本目の柱でおさまらないという印象があったもんですから、そういった意味で、横断的に市民の暮らしというものを横串的に使ったらどうかと思ったわけです。それを全体に関連させないと市民の生き生きした生活、働くも全部含めてですけども、出てこない。市民というのは、市民一人一人だけではなくて企業で働くという意味のも市民ですし、そういったものも全部ひっくるめての市民です。もちろんNPOとか団体の働きも。そこがちょっと前の1本目の柱ではおさまっていない。安全、安心だとか非常に基本的なことにとどまっていると思うんです。その上でどう生きるかということはご自由にという感じなんです、1本目の柱については。それはそれで結構なんですけれど、ここ数回の議論というのはどうもそうでない部分が多かったように思いますので、1本目の柱でおさめていいのかなということを強く感じました。

大滝精一委員長

それはどこのことを。

間庭洋委員

4ページの1です、「やさしさと健やかさに満ちた市民のまちをめざして」という……

大滝精一委員長

4つの都市像の中の頭のところでいいんですね。

間庭洋委員

やすらぐまちも大体同様ですけどね。

小松洋吉委員

ちょっといいですか。

4つの都市像、これは大変うまく表現されていると思うんですが、今、これを全部変えろというわけには。現実的な話です。といって、大変大切な話が出てきたと思っているんです。例えば小野田先生の自律できる地域クラスターという、そちらの話の地域力のアップと若干似ているというか、要は仙台型市民参加社会の実現というのを都市像の中にどんなふうに落とし込むのか、あるいは全面に出していくのかということですけども、4つを生かしながらも、できたら市民参加社会の実現とか自ら考えて自ら行動し自らつくっていくという、肝心のところは何か全面に出せばひとついいのではないかという、ちょっと不勉強ですけども、そういう気はいたします。

それから、そのスクラムというか、連携のところの仙台云々というのは、大変共感を持ってお聞きしましたですけども。

それから、安全、安心とかというのはそのとおりなんですが、どこへ行っても安全、安心なんですが、介護予防なんかも予防が目的になっているのではないかと、福祉は。いや、実は、楽しいとか生きがいあるとか自分らしくとかが目標なんだと。私も介護保険審議会の副会長をしているもんですから、どうも介護予防が目的ではなくて一人一人のもっと楽しい人生とか自分らしさとか、だから快適さとか自分らしさというようなものもどこかに、安全、安心がだめなわけでは決してありませんで、というふうな感じはします。

それから、共生社会というのもよく聞きますが、共生社会というのは非常にいいんですけども、僕はあいまいな表現であって、むしろ市民が希望を持てるような、希望社会と言ったら語弊があるか、なおあいまいになるかもしれませんけど。共生社会というのは僕は本当に広い概念だと思うんです。国と国の共生、宗教と宗教の共生もあります、人間だけでありませんし。でも、言わんとすることはよくわかるのです。格差社会を少し緩和してというふうな趣旨は賛成です。

柳井雅也委員

大滝委員長、ちょっといいですか。

大滝精一委員長

はい。

柳井雅也委員

結局、先回のこの構想は、受け皿づくりとそういった仕組みづくりというのが論点として、メインとしてあったと思うんです。我々がもしもここで新基軸を打ち出そうとするならば、やっぱり主語を明確にするという作業で、恐らくは間庭さんが、今、言われた3の

1、こういったところも、あるいは、場合によってはもうちょっと前のほうに持ってきてそれをきちんとうたっておくということをやっ、なるべく主語を明確にした、私たちが何をやるのかとか、それに対して例えば市はどういうことを考えていくのかとか、計画ではどういうことを構想していくのかという、やっぱり主語が明確でないから、何をするのがわからない、ただ受け皿だけつくっていくという話になっていくんだと思うんです。もうちょっとここを打ち出していったらいいんじゃないですかね、その主体性というものを。

西大立目祥子委員

ちょっと事務局に対してお聞きしたいことがあるので、いいですか。

大滝精一委員長

はい。

西大立目祥子委員

今、この 10 年前につくられたこの総合計画をもとに話しているわけですが、これをつくったときの前の総合計画というのがあったわけですね。策定の趣旨から、都市像、施策の基本構想、基本構想の推進まで、これは 4 つ柱が立っていますけれども、そういうことも前のものを踏襲してこれはできているんですか。このときにかなり大きなものとして変わってこれが出てきているのか、その辺をちょっと教えてください。

伊藤企画市民局次長

基本的な構造としてはほぼ同じだと思います、構造自体は。中身はともかくとして。

間庭洋委員

多分、西大立目さんが意識されているのは、この総合計画というのは市民目線でつくるのか、行政があと実施するためのプランだとしてつくるのかでは、つくり方とか表現だとか、とらえ方が全然違ってくるものになるということをおっしゃりたいんじゃないかと思うんですけど。

西大立目祥子委員

それもありますし、この前の 10 年とこれからの 10 年というのを考えたら、やっぱりこれからの 10 年の変化のほうが恐らく大きいし、経験したことがないことがやってくるということを考えると、言葉ひとつひとつを吟味するということもありますけれども、この基本計画と基本構想の分け方にしても、この 4 つの立て方にしても、何かもう全部見直しから入っていったっていいのではないかというような。結局、都市像の話に戻りますけど、4 つの都市像の下にずっといろいろなものがぶら下がってくることを考えると、だったら市役所の、大変言いにくいんですけども、お仕事なさっている皆さんは、これまでどおりの組織の形態でやっていくことになるのかとも思って。市民も変わらなければいけない時

代になっているわけですから、役所だって変わってほしいと思うわけなんです。そうすると、10年前の総合計画を踏襲する、どのぐらい踏まえるかというところは、検討されてしかるべきかと思うんですけど。

伊藤企画市民局次長

委員長、よろしいでしょうか。

大滝精一委員長

はい、どうぞ。

伊藤企画市民局次長

ちょっと全然お答えにならないかもしれませんが、ちょっとお話をさせていただこうと思います。

私どもの検証作業は、あくまでも基本構想をまず検証しようということで基本計画、10年スパンの基本計画の検証作業をしてきたわけではないんです。あくまでも21世紀中葉を目指した基本構想ということで議論を進めてきました。

とはいえ、実はその議論をしていく中で、本当にその21世紀中葉というのを意識して、例えば人口も70万人台になってしまう、このままいけばですけど、そういったこともしっかりとらえた上での議論ができていたかというところと必ずしもそうではなくて、やっぱりおおむね10年くらいを展望したような議論になっているのが実態でございます。そういう意味では、今、西大立目委員がおっしゃったものの発想のスパンというのは大体そんなようなところなのかもしれません。

ただ、私どもはあくまでも21世紀中葉をという前提だったものですから、そういう発想で見たときに、では今の基本構想、現行の基本構想で描かれている、現行の基本構想も21世紀中葉を目指したもので、都市像もそれを意識した都市像になっていますので、それは恐らく基本的なありようというのは否定されるものではないだろうというところから出発していましたので、そういう意味では前提が、内部の議論の前提が、ややここでご議論いただいていることとは少し違っているというのはあるかと思います。もし基本構想の目指すレンジが、例えば10年でいいんだというようなことであればまた違う議論になるのかとは思いますが。

小野田泰明委員

よくわからないんですけど、前の市長の都市ビジョンも柱が4つなんですね。でも別な4つで、創造、交流、機能集約型都市、杜の都です。何を言いたいかというと、前市長のビジョンでは、最後の杜の都というやつに、10年前の基本計画の健康と杜が含まれているんですよ。要するに健康と杜の都をひとつに押し込めちゃっているわけですね。創造と交流と機能集約型都市、機能集約型都市というのは中枢をつくるとか何かそういうことで、中枢と似ているし、創造というのは学都と割と対応するような話なのですが、新たに新しい柱として交流というのをつくっているんですね、いろいろなところからネタを引っ張って

きて。だから福祉を、市民社会のほうを押し込めて、外にどんどん打って出ていくぞという項目を新たに増やしている。いい悪い別にして、そこには明確に姿勢が読み取れるわけ、こうしますというのが。市民社会より世界の競争社会の中に打って出ましょうというのが明確に出ている。

今回はどういう、今、4つの区分に何を込めるのかというのが、やっぱり先ほどから話しているように、さすがに10年前と同じことは込められないからその中身が何なのかということが問われていると思います。そのときに、その4つでいいのかというのも多分問われている。もしかすると健康というのは余りにも漠として全体を広げ過ぎているからそれをちゃんとわかりやすく、市民参加型の何とかと書き下していくのか、何か積極的な考え方がもうちょっと要るんじゃないでしょうか。

10年前の4つの柱を読んでいて思いましたけど、やっぱり最初にやさしさと健やかさに満ちた市民のまちを目指したというのは、本当にある意味、市民目線で優しい施策をしようと思ったわけですね。だからその姿勢は大事にしたほうがいいと思う。でも、10年前みたいにお金があるわけじゃないし、高齢化も格段に進んでいて、セキュリティーの問題とか子育てとか、以前は想像していなかったいろいろなことが起こっている。そうすると、こういうやさしさと健やかさに満ちた市民のまちを目指していくというかわいい書き方では、次の10年をしのげるかというのはちょっと不安になる。だからもうちょっとメリハリをつけて、強く書いてあげたほうがとか、そういうことはあると思います。

やわらかくこの4つの枠組みを踏襲するというのはいいと思いますけど、もうちょっとその中身については少し踏み込んだ書きぶりが必要ではないでしょうか。先ほどの間庭さんの意見も僕はすごくもともとだなんて聞いていましたが、健康、杜、中枢、学都という分け方でいくと健康が膨らんじゃうんですよ、すごくいろいろ書かなきゃいけないことがいっぱいあるから。さっきの自律できる地域クラスターの話とか、市民型社会の話も書かなきゃいけないし、いろいろ書かなきゃいけないから。

前市長が杜と健康をひとつに押し込めたのと逆に、健康のほうを2つに増やして、もしかすると中枢と学都はひとつにまとめるとか、何かそういうことをやってもいいんじゃないのかな。杜という看板を何かこの4つから外すのはちょっとつらいとか、学都というワードは残っていたほうがいいかもしれないとか、そういう政治的判断はいろいろあると思いますけども、そういうことになってくるような気がします。

大滝精一委員長

そうですね、これはなかなか、特に都市像をどういう構成で組み立てたらいいかというのはいろいろな議論があって、さっきも言いましたように、今すぐこれは決着しなくちゃいけない問題ではないので今後とも議論をしていくべきだと思いますけれども、幾つかの共通認識としては、この4つの都市像自体が意味がなくなっているとかということではなくて、それ自体はくくり方とか、整理の仕方とか、表現の仕方はいろいろあるでしょうけど、少なくとも柱の大事な部分を構成しているということについてはそんなに認識の違いはないんじゃないかと思いますね。

それからもうひとつは、だけどこの4つだけでいいかという問題、それから、先ほどか

らずっと議論が出ているように、その4つの土台がインフラがよくわかりませんが、あるいはその根っこにあるものとかというような、そういうものでもう少し仙台の市民像とか、市民の創造的な取組とかというようなことについてしっかりと記述があったほうがいいんじゃないかと、それから、間庭さんからもあったように、この4つの都市像の中の特に最初の部分については、そういう市民像とかだれが市民なのかとか、その主体性がどういうところにあるかみたいな議論とかなりかかわりを持ってきているので、その整理が必要じゃないかとかという議論があったと思うんです。ですから、その辺のところについては少し論点の整理をこれからもしていかなきゃいけないけれども、そのところについては、こういう議論が起草委員会の中で行われているという報告で私はいいんじゃないかと思います、今の時点では。

さっきちょっと西大立目さんからお話があったように、どの辺を強く意識してこれを基本構想としてとらえたらいいかというのは、これももちろん先ほどから、多分この委員の一人一人の皆さんの受けとめ方がかなり違うんじゃないかなというふうに思うんです。変化もそれからいろいろな社会の動きも切迫していて、それに対してちゃんと仙台市が挑戦できるかどうかということについての対応の仕方とか、緊迫性、緊急性、あるいはそれに対して、ちゃんと挑戦に対してこたえることができるかということについての備え、そういうものについてもっと強調すべきだという意見と、いや、そうはいってもという、この辺はちょっとどういうふうな表現の仕方をしたらいいかわからないんですけども、審議会から与えられている命題はあくまでも2050年前後、そのところでどういう構想を持っていったらいいかということにあるので、そのところは現時点ではちょっと崩せないと思うんです。

ここの起草委員会として、一応21世紀の中葉というのを見据えた上で、そこに向けてどういう仙台市のあり方を考えていったらいいかということなので、ここから先、さらに直近の10年を見たときにどうするかということについては、基本的に基本計画でやりますという話になっているので、基本構想と基本計画は切り離すことはできないんですけど、でも、ここで私たちが与えられている大きなテーマは、2050年なり55年のところでどういうことを見据えて取り組んだらいいかという話をするということになるので、そのところは一応私たちの起草委員会としての与えられているミッションに基本的には力点を置いてということで、多少、そこで言うと言葉の抽象性とかいろいろなものを含んでしまう、総括性とか、それから最初に議論があったようにそれをどうやって戦略的に取り組むかというようなことについては、トーンが弱まってしまうということは必然的に起こってくるんじゃないかと思うんですけど、そこはある程度どこかで折り合いをつけていくことをやらざるを得ないんじゃないかなと思うんですけど。そのところについてはまたちょっと後で皆さんからご意見いただきたいと思いますけれども。

ちょっと議論を整理しなきゃいけないのもう一回戻ります。

そんなことの背景の上で、ひとつはさっき言いましたように策定の趣旨、都市像、それから策定の基本方向、それから基本構想の推進という、これ全体4部構成になっているんですけど、この構成についてはいかがですかというのが、最初に私が言っていた質問なんですけれども、どうですか。

柳井雅也委員

総合計画をつくっていく上で変えられない項目なんですよ。法律か何かで決まっているんじゃないですか、違いますか。関係ないですか。

大滝精一委員長

そんなことはないです。

柳井雅也委員

そうですか。そうしたら変えていけばいいですね、もっとわかりやすいように。

伊藤企画市民局次長

ちょっとよろしいでしょうか。

今、この構成を変えられないわけではないというふうに申し上げましたけれども、ただ、恐らくはこういう項目は中にきちっと記述されているべきであろうという項目だというふうに考えていますので、あとはどういう構造にするかというデザインの問題だなというふうに思います。

大滝精一委員長

書き込むべき柱として、こういうものの柱が入っているというようなことで進めていきますよということについては、これまでは余り大きな、その都市像の中身とかというんじゃないくて、都市像を提示するとか、それをやっていくための策定の趣旨、こういう50年先くらいを見据えた基本構想がどういう策定の趣旨でもってやっていきますかということとをどこかに書き込んでおくとかという、そういう意味でのこれは4部構成になっているわけですね。この4部構成そのものについては、これまで少なくともこの構成自体については議論がなかったと思うんですけど、それはどうですかというのが私の最初の質問です。

柳井雅也委員

例えば、一番基本のところでは2025年をちゃんとシミュレートして、暗いシナリオと明るいシナリオがあって、例えばどちらのほうでいくのかによっても変わってきますし。多分我々の議論はそういう議論を想定しているかということではなくて、現状をずっと拡張していくとどうなのかというその延長で議論していますね。そこがやっぱり我々自身もうひとつ自信が持てないところだと思うんですよ。本当にちゃんと基本構想として時代にたえ得るのかどうかということですね。

そのとき、さっき言った4つの目標だけでいいのかという、そういうやっぱり疑問につながっていったらと思うんです。だから、議論は結局スタートから、最初のほうに戻ってきたような感じなんですよ、ここで我々がどこで決断していくかということだと思います。

大滝精一委員長

さて弱りましたね、そうするともう一回全部仕切り直しという話になっちゃって。

柳井雅也委員

深まっていると思うんです、認識というのは、我々の。そこをどういうふうに踏ん切りをつけてやっていくかと。

恐らくこれ、4つの分類でまだ議論中ですよとやって審議会のほうに投げたら、審議会でまた紛糾するんじゃないかというのは見えていますよね。

大滝精一委員長

そうですね、というか審議会全体がちょっと当惑してしまうと思うんです。ずっと話し合っていますという話になりますが。

柳井雅也委員

この辺ぐらいはちょっと整理、我々の仕事としてやっておいたほうがいいんじゃないですかね。

小野田泰明委員

今、議論しているのは、健康、杜、中枢、学都という10年前の4つの枠を使わないというか、基本構成は同じとしても名前としては少し、21世紀中葉にも耐え得るようなものにするために若干考慮しなければいけない。その次の委員会に出す4つの看板を何にしたらいいか、なかなか今日は結論が出ないんじゃないかと……

大滝精一委員長

いや、その話じゃなくて、私が言っているのはこの4つです。策定の趣旨、それから都市像、それから施策の基本方向、それから基本構想の推進というこの4つくらいの柱で基本構想をつくっていくということ自体についてはどうですかというのが、最初に。

小野田泰明委員

基本構想の構造ですか。

大滝精一委員長

そうそう、基本構想の構造です。

小松洋吉委員

これはもうやっぱり組まなくてはいけないでしょう。これはね。

柳井雅也委員

スケルトンとしてはこういう形でやっていくということで。

大滝精一委員長

これについては、ではよろしいですね。基本的にはこういうところを中心としてつくっていきますということですね。では、基本構想の構造はそういう方向でいくということで確認をしたということですね。

次に、さっきの資料1の事務局からの原案では、その策定の趣旨のところについては幾つかの項目が、もともとの仙台市の基本構想の中ではずっと列挙されているんですけども、特にこの10年の変化というものを見た上で、策定当時の時代認識と現在の時代認識の変化に合わせて幾つか見直していく必要があるんじゃないかという指摘がありました。

その言葉とか表現の仕方についてはいろいろあると思いますが、例えばさっきの格差の問題とか、それから環境問題に対するもう少し認識の深まりとか、あるいは成熟社会における成長エンジンなんかはどうするかとか、あるいは社会資本の整備というのも新規から維持管理のようなもの、アセットマネジメントのようなものに力点を移していくということについての必要性、ほかにも幾つかあると思いますが、そういうようなことについての軸足をもう少し、この10年の変化も振り返った上で認識して、そこをきちんと一番頭の策定の趣旨というところで書き込んでいく必要があるんじゃないかという、それが資料1の提案の大きな中身になっていると思うんですけども。これについてはいかがでしょうか。

小松洋吉委員

ちょっといいですか。

どう表現するかは別ですが、策定の趣旨のその中身の中に、先ほど来、出ておりました、私は市民行動と言っているんですが市民参加社会の実現とか、それから自律できる、小野田先生の言葉だと地域クラスターという、どう表現するかはあれですけども、中身としては何か、今度の説明の中には入れてもいいのではないかという気もしますが、それはそちらの何か地域力のアップというような説明とも何の矛盾もしないのではないかなと思うんですけど。基本的には了解です。

大滝精一委員長

盛り込むべき、何から盛り込んだらいいかどうかということについての具体的な中身についてはこれから起草していくので、その中でもっと議論できると思うんです。基本的な方向としては、この策定の趣旨の中に、今、言ったような10年間の変化を見ながら、今後起こるであろうことについて、ある程度その軸足を移す部分については特に見直しをしていくという形で書き込んでいくというか、そこについてはよろしいですか。

小松洋吉委員

ええ、いいと思います。

大滝精一委員長

では、1の策定の趣旨については終わりです。

2の都市像については、これは最大の議論があるところなので、これについては一応幾つかの議論があったということを次の審議会で報告をするということにとどめておいたほうがいいと思います。さっきも幾つか整理しましたが、現行の4つのものについて、それをもう最初から柱として落としてしまったほうがいいとかという議論はなくて、4つの柱自体はそれなりの意味とか基本構想としての重要性を持っているということですから、それで十分かということについてはいろいろな議論があったということです。

ひとつはやっぱり、先ほどから繰り返していますけれども、仙台市民像とか市民性とか、市民の持っているイニシアチブとか主体性、あるいはだれが市民なのかということについてのもう少し明確な記述、あるいはここまで踏み込んでいいかどうか分かりませんが、市民と行政あるいは企業のような、そういう主体の役割のようなものについてもっと踏み込んだ都市像を書き込む必要があるのではないかなというような指摘。

それから、特に小野田先生からあったように、既存のこの4つの枠組みだけで議論することが、現実的には特に縦割りの構造のようなものをそのまま温存してしまうんじゃないかということに関する危険性、もう少しとにかく既存の組織の壁とかセクターの壁を横断して協働するというようなことをするには何が必要かという意識をもって都市像を書いていったほうがいいんじゃないかなというようなご指摘。

それから、これはさっき間庭さんからもありましたように、特に4つの都市像の最初の部分のところは市民についてのいろいろな記述が出てくるわけですが、その4つの都市像のひとつとしてそこに押し込めるというようなやり方は必ずしも適切ではないんじゃないか、もうちょっと市民の目線とか市民像のようなものが幾つかの既存の柱とリンクできるような取組も必要じゃないかということ。

まだほかにもちょっと幾つかあったかもしれませんが、そういうような指摘があったかと思います。最もラジカルな、さっきの小野田先生の提案はかなりラジカルで、もうちょっと4つの柱を換骨奪胎しちゃったほうがいいんじゃないかというのに近いものかもしれませんが、そういうものから、基本的には4つの柱は堅持するけれども、それだけで十分ではないんじゃないかというご指摘、そういう幾つかのご指摘があったと思いますので、そのことについては次の審議会で、こういう議論があって、今、この議論についてはいろいろな展開をしているという報告にとどめていくということではないかと思います。今日無理にここでそれをまとめる必要は全くないと思いますので、そういう報告をしたいと思いますが、そんな形でよろしいですか、この2の都市像のところは。今日一番議論があったところなんですけど。

小野田泰明委員

参考までに。僕、この前のやつを読んで結構ああそういうことか、分け方ってこういうふうにポリシーを表明するんだなと思ったんですけど、10年前、藤井市長のときはこういう分け方をしていて、梅原市長のときはこういう分け方を、今は何かこういうキーワードがたくさん出ていますと、4つにくくらないけどこういうのが出ていますよぐらいの

整理はあっても、キーワードを挙げるぐらいはあってもいいのかなと思いました。

確かに結論は出ていないけどかなり深い議論はされているわけだし、お互いに像を共有し合いながら、さすがにこのメンバーなので何となくキーワードが10個とかぐらいは出てきていると思うんですよ。どういう順番でどう書くは別として。それらを提示しながら、今こういう議論をしていて、大体4つぐらいに収れんさせて大きな筋を出そうと思っていますぐらいは言えるんじゃないですか。

大滝精一委員長

ちょっと、ではそのあたりのキーワードの選び方とか、それからどんなやり方で報告したらいいかということについては事務局と相談して、少し報告のやり方とか、こういうことがキーワードとして出ていて、このあたりのところが都市像の骨格のようなものをつくり出していくというような報告をしていくということでもよろしいですか。

もちろん、これはだからいろいろな異論もあるし、いろいろな考え方の違いがあるということがあるので、こういう議論があって、その中でこういうものが大きな柱としての候補として、いろいろな形で議論されているというような言い方をしたいと思いますけれども。

では、その辺のところはちょっと事務局と詰めさせてください。

そうすると、ここから先の話は、ちょっと、特に3番目の施策の基本方向とそれから最後の基本構想の推進については、この都市像がどうなるかということによって中身が変わってきてしまうことが当然あるので、もちろん既に検証の中で事務局のほうでしていただいた、時代の変化とともに変えなくちゃいけない部分がたくさんあるということは私たちも当然理解できているんですけども、この基本方向自体をどういうふうに整理したらいいかということについては、今の段階では、後ろにつながっている部分ということについては明快にこういう方向でいくということはちょっと議論しにくいと思います。

それから、先ほど冒頭で私が質問したような横断的な主要プロジェクトのことについても、もう少しこれは起草委員会の中でちょっと議論させていただかないと、こういうようなものを横断的なものとして取り上げるということではまだちょっと時間が足りないという、間庭さんのほうからももう少し違う議論があるんじゃないかとかということもありましたので、その辺についてはちょっともう少し議論を深めていくということにしたいと思います。

間庭洋委員

都市像はさっきの先生のとおりでいいんですが、その都市像のもとで4つの基本方向が今のところで、きれいにそのもとで体系化されているような感じで出てきているわけですね、前回。

今、大滝委員長がおっしゃったように、施策の基本方向という、要するに具体になればなるほど、都市像が、どう施策でやるかということになればなるほど相互関連性が非常に高くなってくるわけですので、そこについてもすっきり都市像のための4つごとの別々の体系化された施策の基本方向というきれいな話じゃなくて、どう横串、あるいは筋交い、

いろいろな言葉が出ましたけども、そういうことが議論としてなっていることはちょっとご紹介していただければなというのはあります。引き続きの課題でもあるんでしょうが。

柳井雅也委員

基本構想の中のどこかにそれを入れておくという、文言として組み込んでおいておくというのは、つまり単純なゾーニングではいけないよということを、重なり合っている、そういう時代にちゃんと対応性を持ちながら適応していくんだということを、どこか策定の趣旨の中でうたっておいたほうがいいと思います。

大滝精一委員長

そうですね。ではそういう、都市像の柱をどうつくるかは別としても、そういう都市像を横断するというか横串を刺すような幾つかの重要なテーマとか課題というようなものについてそういう横断的な取り組みをしていくとか、そこに重点を絞っているいろいろなことをしていくということの必要性を特に強調しておくということですかね。

それから、資料の1で事務局のほうから提案があります、特に、これはですから基本構想の推進という最後のところで、市民主体の都市経営をより充実していくというような提案があったと思いますけれども、その提案自体は皆さんの今日の議論の中ではおおむね賛成を得られていると思います。ただし、この最後のところに行ってこういう表現をするというのが妥当かどうかについては、さっきの都市像のくくり方とか柱の立て方によって変わってくるので、この趣旨については何も問題ないと思いますけれども、どのような場所に、どういうふうにしてこの市民主体の都市経営をより充実するというような表現を入れ込むかについては、なお検討していくということにさせてもらったほうがいいと思います。

すみません、どうもありがとうございました。

ちょっと時間が長くなってしまっただけで申し訳ないんですけども、それから明確な、ここまできちんとまとめましたという形でなくて、幾つかの重要な部分がペンディングになっているんですけども、一応議論としてはそんな形で整理させていただきたいと思います。それから、次の審議会でどんな整理の仕方をしていったらいいかということについては事務局とご相談させていただきたいと思いますけれども、多分時間的に余り余裕がないので、もし事前に見ていただけるようなことがあれば皆さんにも少し見ていただくということになるかと思いますが、基本的には審議会に対する報告の仕方については私のほうに一任いただけるとありがたいと思います。

(はいの声あり)

大滝精一委員長

それでは、まだまだ進行中ということなんですけども、ただいまの議論を取りまとめて、審議会に対して起草委員会の新しい総合計画の策定方針案のようなもの、それを報告したいと思います。

今、申し上げましたように、審議会には文書でお示しする必要があると思いますので、

事務局のほうでたたき台を作成していただいて、あるいはそれについて各委員からご意見をいただいた上で、私と事務局との間で最終調整して審議会に提出するということにしたいと思います。そういう流れで進めたいと思います。よろしいでしょうか。

(はいの声あり)

大滝精一委員長

ありがとうございました。

それでは、事務局の皆さんにも、そういう形で進めたいと思いますけどよろしいですか。では、そんな形で流れを進めていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それではお願いします。

(3) その他

折田総合計画課長

それでは、もう時間が過ぎております。簡単に残っているものについてご説明いたしますけれども、資料の4でございます。

市政だよりの1月号に、共につくる未来の仙台ということで、前回の審議会で市民の方々からさまざまご意見いただいたほうがいいんじゃないかということで、会長とあと委員の数名の方にご協力いただきまして、こういった形で市民の皆様に関わりをさせていただきました。22日が締切りでございましたので、まだ集計の途上でございますけれども約2,000件弱の意見をちょうだいしております。またこの状況につきまして、内容をまとめて審議会及び起草委員会のほうにご報告させていただきたいと考えております。

それから、今後のスケジュールについてでございますけれども、当初、事務局では年度内を目途に基本構想の中間案を取りまとめていただけたらということで考えておりましたが、本日のご議論をお伺いしている中でも、さすがにちょっとそれではなかなか時間的に厳しいのかなと。あと、回数につきましても次で3回程度ということで当初お願いをしておったんですが、多少回数を増やさせていただいて議論を深めさせていただければと考えておりますので、そのスケジュール化についてはまた委員長とも相談をさせていただきまして、皆様にご相談をさせていただきたいと思っております。

事務局からは以上でございます。

大滝精一委員長

大変お忙しいところ恐縮ですけれども、今日の議論の進行状況だととてもあと1回ではなかなか厳しいということもありますし、皆様方とちょっとご相談の上、追加的にもう少し議論を深めていくということをせざるを得ないと思いますので、その辺については改めて皆様方とスケジュール調整をした上で、追加的に起草委員会をあともう1回程度増やしてということで進めていきたいと思います。1回でやれるかどうか、ちょっと私今日自信がなくなっちゃったんですけど、その辺は皆様方とご相談をして、いろいろな議論がたくさん出てきたので、その辺のところをどこまで集約できるかはちょっと回数だけではよく

わからないんですけれども、少なくとも最低あと1回、プラスアルファくらいは絶対しないともまずいかと思いますので、その辺のところについては皆様方とご相談をして進めてまいりたいと思います。大変お忙しいところ恐縮ですけれども、何とぞご協力いただきたいと思います。

それではそんなところでよろしいですか。委員の皆さん方から何かご意見等ありましたらお願いしたいと思います。

ちょっと事柄が多岐に渡っておりますので、すばつとすぐにうまく議論が進むというわけになかなかいかないと思うんですけども、大変申しわけありません、何か行ったり来たりするというような議論になるかと思えますけども、是非いいものにしたいと思えますので、皆さん方も懲りずにいろいろなご提案、ご意見をください。よろしくお願いいたします。

9 閉会

大滝精一委員長

それではよろしいですか。ではありがとうございました。これで閉じたいと思います。